

子育てにおける勉強の位置に関する考察

—50～60年代教育雑誌の教育相談欄の分析から—

李 貞淑

1. 研究目的と課題

1975年から8年間にわたって、板橋区の小・中学校の家庭教育学級で講演した川田秋子によると、講演の題の頻度が多かったのは「家庭における躰について—83%」であった。しかし、講演が終わってから行う質疑応答の時は、例外なく勉強優先的な質問を受ける。質問者はこれらを「しつけ」の問題と考えて質問してくるのであるが、川田はこれらを「しつけ」の問題とは考えないと述べている⁽¹⁾。

「家庭教育学級」は、1964年に、文部省が家庭教育の問題を研究していく場を子を持つ親に提供することを目的として始めた。ここでは、上述している内容の中で「家庭教育学級」の講演を終えた後の質問に注目したい。講演の内容は家庭における躰についてであるが、質疑応答の時は勉強優先的な質問が多く、質問者はこれらを「しつけ」の問題と考えていると川田が述べているように、親にとって勉強はしつけの中で重要な位置を占めていると同時に、子育て・教育をする際の重要な関心事であった。

いつごろから勉強は親が子育てをする際の重要な関心事になったのだろうか。本論では高度成長期以降の子育てと勉強の関係について見ていきたい。

50年代半ば、「心理学ママ」がマスコミに登場して流行する。都市部の新中間層の母親の中には、心理学者の書いた本を熱心に読んでそこに書いてあるアドバイス通りに我が子を育てようとする、あるいは知能検査のような心理学的測定をうのみにしたり、知能検査の練習をさせたりする母親たちが登場し、そのような母親は「心理学ママ」と呼ばれた。50年代半ばは塾やおけいこの過剰さも問題として批判されていた⁽²⁾⁽³⁾。学習塾が学校教育をおびやかすものとして批判的になるのはもっと後のことだが⁽⁴⁾、すでにこの時期には毎日塾に通う子どもが都市部には登場してきていたのである。以上のような子どもに対する教育姿勢は都市部の新中間層家族の中で登場していたけれども、学歴志向や進学に対する意識は新中間層のみならず、農村を含めた他の広い階層に広がってきていた⁽⁵⁾。1960年代前半には「高校全入」「高校増設」を求める運動など、自分の子どもはせめて「普通高校までは出ておく」という教育期待から、多くの父母は幼い時からのわが子の教育に対して以前とは比較にならないほど深い関心をよせることになる⁽⁶⁾⁽⁷⁾。また、同じ時期に「教育ママ」という流行語がメディアに登場して、母親の過剰な教育姿勢や過保護が問題として非難された。では、親の

(い・じょんすく 横浜市立大学大学院)

子どもの教育に関する研究にはどのようなものがあるだろうか。

親の子どもの教育に関する研究として、学歴意識や行動についての研究が挙げられる。

農民の教育意識や行動について、兵庫県篠山の農村集落の調査では、学歴主義的意識が中・下層へと浸透していったのは昭和の初めのごろであった⁸⁾。また、山崎鎮親は、新聞の世論調査をもとに、1950 年ごろには人々の間に学歴志向が汎化していたであろうと主張している⁹⁾。しかし、学歴志向が広がっていたけれども実際進学できたかどうかは別である。50 年代半ばの山梨県下での調査では、学歴を望む意識は中・下層まで広がっているものの、実際的には労働力の必要や経済的な事情が子どもの進学をはばんでいた事が明らかにされている¹⁰⁾。1964 年広島大学教育学部教育社会学研究室で実施した「親の子への進学期待」の調査結果では、親の学歴が高いほど進学期待は高く、親の学歴が下がるにつれて子の進学期待は減少しているが、それでも子どもに大学以上の学歴を期待しているのは小卒者で約 72 %であると述べている¹¹⁾。しかし、これらの研究は、親の学歴意識については明らかにしているものの、親が子どもの教育にどのように関わってきたかについては触れていない。

もう一つ、親の子どもの教育に関する研究には、「教育ママ」についての研究が挙げられる。

二関隆美は「教育ママ」を「子の学校教育や学業成績に強い関心・期待・評価を示す反面、学業以外の生活分野における陶冶価値について関心や配慮が不足しており、しつけや生活指導の方面での教育意識が低い母親」と定義した¹²⁾。本田由紀は「教育ママ」の発生要因は、子どもの数の変化、子どもの「質」=子どもへの意味づけの変化、子育ての変化、労働市場の変化、学校教育の変化であると述べている¹³⁾。しかし、これらの研究も、どのような母親が「教育ママ」であるかについて定義したり、また、社会背景などから「教育ママ」が登場した原因については明らかにしているものの、実際、母親は子どもの教育にどのように関わってきたか、については具体的に述べていない。

以上のように、学歴に関する意識調査やどのような母親が「教育ママ」であるか、「教育ママ」はどのように発生したかを明らかにした研究はあるけれども、実際、親が子どもの教育、特に、学校教育にどのように関わってきたか、学校教育についてどのような悩みを持っていたか、学校教育は子育てにどのような影響を与えたかなど、親の側から見た研究は十分ではない。

本論では、地域の差や親の職業による差はあるものの農村の中・下層まで学歴志向が広まってきた 50 年代と、それまでは新中産階級の固有の特徴であると言われていた「教育ママ」が、さまざまな階層の親に広がり始めた 60 年代を中心に、親が子どもの教育、とりわけ学校教育・勉強にどのように関わってきたかについて検討してみることにする。

2 研究方法

母親が子どもの教育に関する情報を得る方法の一つに、メディアの役割が考えられる。本論では、数あるメディアの中から教育雑誌を取り上げて、学校教育・勉強が子育て・教育にどのような影響を与えてきたかを見ていきたい。

教育雑誌の中から、1948 年に創刊され現在まで継続的に発行されてきた点に着目して、静岡出版『P T A 教室』『母と生活』誌を選択する。(創刊当時 1948 年は『P T A 教室』で

表1 『PTA 教室』『母と生活』の「教育相談」の内容

	勉強	性格	身体	問題行動	しつけ	進学・進路	学校生活・先生への疑問不安	その他
1949	○○			○●	●			
1950	○○		●●	○●●	●●●●	●●●	●●	●●●●●●●●●●
1951	○○○	●●	●●	●○●	●	●	●	●●○
1952	○○○○	●●	○	●○●	●●●●	○●●●●●●●●	●○●●	●●●●●●●●
1953	○○○○○		●●	○	●●●●●●●●		●●○	○●●●●●●●
1954		●○	○	○●○				●
1955	○○○○	●○		●	○		●●	●●
1956		●●		●	○		●	●●●○●●●●
1957	○○	●		●			●○○	●●●●●●
1958	○	●	●	●	●○		●	●●
1959	○	○●	●●	●	●●○		○	
1960	○○○○	●●	●		●●○		○	
1961		●●○		●	●		○○○●	●●●
1962	○○	●○	●		●●●		●	●●
1963	○	○●	●		○●●●●○		●	●
1964	○○○	●	●	●	○●			●●●
1965	○○	●○●○			●●	●		●●
1966		○●●○●○ ○	●		●		○	●●
1967		●●●●●●	●●		●○			●●
1968	○	○○○●●○						●●●●●●
1969		○●	○●●	●				●
1970		●○	○●		○●		●○	●●
1971	○○	○●	●	●				●●●
1972	○	○●					○	●

○は「勉強」に関する悩みについて言及している内容

●は「勉強」に関する悩みについて言及していない内容

あったが、1958年12月に雑誌名が『母と生活』に、1993年雑誌名には『ふぁみりす』に再変更する。ここで検討する雑誌は『PTA教室』『母と生活』である。『PTA教室』『母と生活』誌における「教育相談」欄を取り上げて分析対象にする。「教育相談」を分析対象にするには相談された内容の真実性、また投稿を選択する際の基準などの問題はあっても、相談内容が読者に与える影響は大きいと考えられる。「教育相談」は、『PTA教室』(1949年7月～1958年9月)『母と生活』(1958年12月～1972年5月)まで掲載されているため、50年代と60年代の学校教育・勉強が親の子育て・教育に与えた影響を見る上でいい材料である。学校教育が親の子育て・教育に与えた影響について考えるとき、「勉強」は重

要なキーワードである。そのため、本論では、「教育相談」の中から「勉強」に関する相談だけを取りだして検討してみることにする。

『PTA教室』『母と生活』は、静岡県内だけで発行されている雑誌である。『静岡教育出版 50 年史』によると、創刊当初は、PTA 幹部対象の内容であったが、次第に一般の母親たちにも親しまれ、理解できるような内容に切り替えられら。雑誌の内容の方も P T A づくりという角度からだけの編集でなく、親と子をめぐる家庭生活全般の民主化という狙いで、取材範囲が急速に広げられ、1950 年代には最高 26,000 部に、60 年代、70 年代は最高 29,000 部という発行部数を持つようにいった¹⁴⁾。

さまざまな教育雑誌の中から、静岡県内だけで読まれている『PTA 教室』『母と生活』を検討材料として選択した理由は、『PTA 教室』『母と生活』の「教育相談」欄のように親からの子どもの教育に関する相談、特に、学校生活や勉強に関する相談を長い間掲載している雑誌は他に見つけることができなかった。『PTA 教室』『母と生活』の「教育相談」欄の検討は重要な意義を持っていると判断できるからである。

表 I は、相談内容を「勉強」、「性格」、「身体」、「問題行動」、「しつけ」、「進学・進路」、「学校生活・先生への疑問不安」、「その他」と分類したものである。分類方法は、相談者が何について相談しているかについて分類している。例えば、相談内容には勉強についても言及しているが相談しなかったものは性格であった場合は「性格」と分類する。分類の中の「その他」とは、「家族問題」、「PTA の運営」、「子どもからの小遣いについての相談」、「先生からの相談」など、親からの子どもについての相談以外のものである。

表 I では、「教育相談」の相談件数を○と●で表示している。○とは、相談内容に少しでも子どもの勉強に関する問題について言及している場合は○で表示している。表 I の「勉強」についての項目の相談内容は勉強について言及しているため、すべて○で件数を表示している。「勉強」以外の項目にも○で表示しているところがある。「性格」の項目の中に○で件数を表示しているものは、相談している内容は「性格」に関するものであるけれども、子どもの性格について説明しながら「勉強」と関連付けて言及している。例えば、「そそっかしい性格なので困っている。テストの時の態度にその性格がよく表れている」など、性格とテストを関連付けて相談している時は、○で表示している。●とは、まったく勉強の問題について言及していない相談は●で表示している。

「教育相談」の総件数（○と●の表示をあわせた件数）は 297 件である（1950 年 3 月から 1953 年 6 月は「教育相談」の毎月の件数が複数（3, 4 件）掲載されている。それ以外の毎月の相談件数は一件ずつ掲載されている）。その中で「勉強」の問題について言及している相談件数（○で表示している件数）は 98 件である。

3. 「勉強」に関する相談の検討

次は、「勉強」に関する内容について検討してみたい。

表 II は、表 I の中から○だけをとりだして表にしたものである。つまり、「教育相談」から「勉強」に関する悩みについて言及されている内容だけを取り出して「勉強しない」、「成

表Ⅱ 「教育相談」中「勉強」に関する悩みについて言及している相談

	勉強をしない	成績が悪い	母親が勉強を見てやれない	学校・先生へ不安不満
1949	○	○		
1950	○○	○		○
1951	○○○○		○	
1952	○○○○○	○○		○
1953	○○○○	○	○	○
1954	○○○	○		
1955	○○○○○		○	
1956	○	○		○
1957	○		○	○○
1958	○○			
1959	○	○	○	○
1960	○○	○	○○	○
1961	○			○○○
1962	○	○○		
1963	○○	○	○	
1964		○○	○○	
1965	○○	○	○	
1966	○○	○○		○
1967	○			
1968	○	○○○○		
1969		○○	○	
1970	○○	○		○
1971		○○○		
1972	○	○		○

績が悪い」、「母親が勉強をみてやれない」、「学校・先生への不安・不満」に分類したものである。分類方法は相談内容の中で勉強に関する悩みは勉強のどの部分と関連付けて相談しているかで分類している。

表Ⅱの分類から検討してみたものは、(1)「勉強」・「成績」への相談内容は年代によってどのように変化しているのか、(2)母親は勉強をみてやることに関してどのような悩みを持っていたのか、そこには年代的变化が見られるのか、(3)勉強は子育てをする際にどのような影響を与えているのか、という諸点である。

(1) 「勉強」・「成績」に関する相談内容の年代的变化

ここでは、表Ⅱの「勉強をしない」、「成績が悪い」の項目に注目してみたい。

表Ⅱの「勉強をしない」と「成績が悪い」で示しているようにそこには年代的变化が見られる。「勉強をしない」についての相談が1955年以前に多いのに対して、「成績が悪い」に

ついでに相談は 1962 年以降増えている。一般的には、「勉強をしないので成績が悪い。どうしたらいいのか」といった相談があると思われるが、ここでは、「勉強をしないので成績が悪い」のではなく、「勉強をしないのでどうしたらいいのか」のような相談が多い年代と、「勉強ができないので、成績がよくないのでどうしたらいいのか」のような相談が多い年代に分かれているのである。そして、「勉強をしない」についての相談と、「成績が悪い」についての相談にはそれぞれ相談内容に年代的变化が見られる。

次は、相談内容からその変化を具体的に検討してみたものである。

まず、「勉強をしない」ことについて、50 年代は、単に「勉強をしないので困っている」との相談が目立つのである。

表 II で示しているように、「勉強をしない」の相談は、60 年代よりは 50 年代の方が多。もちろん、60 年以降も、勉強をしないと言及している相談はあるけれども、50 年代の相談の特徴は、「勉強をしないのでどうしたらいいにか」について言及しているだけの相談が多く、具体的な勉強内容や成績・テストについて言及している相談は見ることができない。例えば、「勉強が長続きしない」(51、10) (51、11)、「根気よく勉強させたい」(52、7)、「勉強を嫌がって困っている」(53、12) などの内容である。

また、相談内容には、勉強をしない原因について、「紙芝居と漫画本に夢中で勉強しない」(49、7)、「運動に集中しすぎて勉強しない」(52、6) (55、10) (57、11)、「テレビが見たくて勉強しない」(60、6) など、「～が原因で勉強をしない」など言及しているだけで、やはり勉強について具体的に言及している相談は見られない。

それに比べて、60 年以降の勉強についての相談は、勉強をしないことについて言及しながら、勉強の内容や勉強の様子について詳細に言及している相談が目立つのである。

例えば、「勉強にむら気が出て心配である。特に算数の勉強の時、ぐずぐずして、たった 5 問くらいで 30 分かかる」(62、11)、「算数の問題をやっているとき、かならず 1、2 問わかりきったところが間違っている。後で見直すことをしない」(63、10)、「口で聞けばできるが、テストというとき間違いが多い」(65、7) など、「家に帰ってから勉強をしない」と言及しているだけではなく、算数の勉強にかかる時間や、わかりきった問題を間違っていることへの悩みなど、子どもの勉強している様子について言及している相談が増加している。

60 年代のもう一つの特徴は、勉強をしている様子について詳細に言及しているだけではなく、テストや成績についても詳細に言及している相談が出現したことである。

「(省略) 正しいものに○を、間違ったものに△をと書いてあるのに、△のところに×を書いてあるのです。驚いているところへ線をひくとあるのに、線をひくのをおぼれているのです。(省略) そのつど問題の中で、聞いているところに線をひくようにやらせてみます。(省略) いろんな方法で直せるように努力してきたつもりですが、学年末になっても直らないのは、俗にいう三つ子魂でしょうか。(省略)」(66、7)。「先生の話を書く力が全然ないのです。(省略) 一学期の成績表を見てあまりにも悪いのには驚きました(省略)」(66、12) など、テストの点数がいい、悪いについて言及しているだけではなく、テストの時の様子についてどこがどのように間違っているか具体的に言及しながら、そのために母親はいろいろな方法で努力していることについても具体的に言及している。

また、60年代は、通信簿の点数を具体的に言及しながら、勉強について相談している内容が出現する。

次は、通信簿のつけ方への疑問について相談である。「小2年の男の子。普段学校でやるテストの点は、だいたい80点以上で私も安心しておりましたが、この前、先生からいただいてきた通信簿を見ますと、いちばんテストの成績のよかったはずの算数と理科が予想に反して、4になっていたのです。その前までは、同じくらいの成績でありながら、5がついていたのですが、これはいったいどうしたわけでしょうか。(省略) また近所の別のクラスに知っている子どもさんをもつ方の話だとテストの点は私の家の子どもより悪いような話なのに、4がついていておかあさんも『以外に成績がよくて』と喜んでいました。(省略) どうもふにおちません。(省略)」(59、4)と、テストの点はいいのに通信簿の点はよくない、近所の子どものほうがテストの点は悪いのに通信簿の点はいいなどと、近所の子よりも通信簿の点が低いことへの不満から、学校での通信簿のつけかたに疑問をもっているとの相談内容である。次の相談は、通信簿の点数は母親の子育てをする際の一つの基準になっているとかがえる内容である。

「上の男の子(6年、3年)は親の手もわずらわさずそれぞれいい成績をとっています。(省略) 3人目の娘は勉強嫌いです。幾度もなく繰り返しやればできるのですが、その忍耐力がないのです。(省略) 頭が一番鈍いと思われていた次男が学校の通信簿は一番よく、もう一方でオール5になります。それに比べて一番おりこうだなとおもっていた娘が一番悪くて2と3しかありません。(省略)」(62、6)など、子育てをする時に母親が思っていた子どもの性格や様子と母親が予測していた学校の通信簿の点数との違いで戸惑っていることについての内容である。むろん悩みの対象は頭が鈍いと思っていたのに通信簿が一番いい次男ではなく、一番おりこうとおもっていた娘についての相談である。

50年代にも勉強が出来ないことについての相談はあるけれども、相談内容はすべて「知能が遅れていて勉強についていけない。」(49、12) (52、5) (53、5) ことへの相談である。

以上のように、50年代は勉強をしないことについて言及しているだけの相談があるのに対して、60年代は、子どもの勉強やテストの内容・様子、成績に深く関心を持っている様子がうかがえる相談が増加している。

相談の中には、「そのつど問題の中で、聞いているところに線をひくようにやらせてみたり。(省略) いろんな方法で直せるように努力してきたつもりですが」と、母親の勉強を見てあげている時の様子について言及している内容がある。母親は勉強をみてあげることにに関してどのような悩みを持っていたのだろうか、悩みの内容は時代によってどのように変化していったのだろうか。次は、母親が勉強をみてあげる時の悩みと、その悩みの年代的变化について相談の中から検討したものである。

(2) 母親の勉強への関わり

母親が子どもの勉強をみてあげることにに関してどのような悩みを持っていたのかを見るため、表IIの「母親が勉強をみてやれない」項目に注目してみたい。相談件数はそれほど多くないけれども、当時の母親はどのように子どもの勉強をみてあげていたのか、勉強をみてあ

げる時どのような悩みを持っていたのかなど、母親の勉強への関わりについて検討する上では重要な項目であると考えられる。

「勉強をみてやれない」の項目で注目する点は、50年代と60年代の相談の内容に年代的变化がみられることである。50年代は「仕事が忙しくて子どもの勉強をみてやれない。どうしたらいいのか」と言及している相談が目立つのである。

「主人が戦死したとき息子は1ヶ月。1年生になった息子は勉強嫌いで、字もろくにしらず、自分が気に入くないことがあると、すぐ怒るふてくさる癖があり、私もこの家庭で（義兄嫁の家）同居している点から気を小さくしていますので悩んでいます。私は義兄嫁一家の仕事を手伝っており、子どもの教育費も出してもらっているしまつです。現在の生活では、子どもの勉強を見てやっている暇などありません。」(51、9)「生活が苦しいため仕事をしなければならぬので子どもの勉強がみてやれない」(57、2)、「商売がいそがしくて子どもの勉強をみてやれない」(59、12)のように、子どもの勉強はみてあげたいけれども、子どもの勉強は心配だけれども、それよりも、生活の苦しさ、商売の忙しさを強調している。

それに比べて、60年代は「今は何らかの形で勉強をみてやっているが、今のままでは心配である」のような相談が目立つのである。母親の学力が低いため子どもに勉強を教えることができないので私（母親）がもっと勉強しなければならない、塾や家庭教師を雇う時の注意点についての質問などが言及されている。

「街の繁華街に店を開いていますが、中学1年、小学校4年、2年の男の子がいます。商売のつごうで子ども達が小学校へ入った時から、今まで上の二人は塾に通わせて勉強を見てもらいました。ところが困ることに3男は非常に勉強の成績も悪く、この子も塾に通わせようと思いましたが、帰ってきてからむりやりバスで遠い所の塾まで通わせるのは心配で思いやられるのです。学校の先生は、まだ小さいのだからそんなに心配しなくても、と言われるのですが、やはり、何かの形で勉強もみてやらなくてはかわいそうに思うのです。いっそのこと、上の二人を塾に行かせるのをやめさせて、家へアルバイトの学生さんでもいいからきてもらって、3人で勉強を見てもらおうと思うのですが、どんなものでしょうか。もし家庭教師を雇うとすればどんなことに気をつければいいのか教えてください。」(1960、10)

次は、3年生までは母親自身が勉強を見てあげているが学年が上がるにつれ勉強が難しくなって教えられないことへの悩み相談である。「最近成績のほうもだんだん悪くなってきているような気がする。私も長男の勉強を見てやれるくらい学力をこれからつけようと思うのですが・・・」(60、12)と母親は自分が学力がないため子どもに勉強を教えられなくて成績が落ちてきていると言及している。「働きながら子どもの勉強も見てやっているが、4人の子どもの勉強を全部みてあげるのは難しい」(64、6)など、単に忙しいので勉強がみてあげられないと心配してだけでなく、親がみてやれないので塾に行かせたり、今は母親自身今勉強をみてやっているけれどもこのままではだめだと思うなど、解決策としてすでになんらかの形で勉強は見てやっているけれども今のままでは心配であるとの相談が目立つのである。

また、60年代は、何らかの形で子どもの勉強を見てあげているけれども心配であるとの相談が増加すると同時に、子どもの勉強について悩んでいる母親自身の様子について言及し

ている相談が出現する。

「勉強」についての相談の中から、母親の様子について言及している相談を取り出して見ると、相談件数はそれほど多くないけれども、50年代には勉強についての相談はあっても母親自身の様子について言及している相談は見ることができなかった。

相談には勉強が出来ない子どもの様子だけではなくて、子どもが勉強出来ないことで母親が悩んでいる様子についても言及している。

「(中略) 上の男の子は親の手もわずらわさず、それぞれいい成績をとっています。3人目の娘も上に従って、別に字も教えませんでしたが、勉強を始めてみて、どうもみんなについていかれていないことに気がつきました。家ではなかなかちゃっかりしていて、食べ物なども良くて、大きな物をとってしまうという素早しさもあり、しゃべることも、3年の兄をしのぐくらいしっかり話ができます。(中略) 通信簿も、一番おricだと思っていた娘が一番悪くて2と3しかありません。やはり参観に行ってもはずみがありません。この娘は一月生まれで早産児で体も小さく、一人娘でもあるので、姑も必要以上に可愛がります。今度もこんな状態で行ってほうがよいでしょうか。それとも一年遅らせたほうがこの子のために良いでしょうか。3人目の子どもで私はつまづいています」(62, 6) と、相談内容には娘の通信簿の点数が悪い原因を早生まれ、早産児で体が小さい、可愛がりすぎなどいろんな方向で考えながら悩んでいる母親の様子がうかがえることができる。

「(中略) そそっかしい性格です。それを裏付けるような、テストを二枚持っています。一枚は問題に正しい物には○を、間違った物には△をと書いてあるのに、△をかくところへ×を書いてあるのです。もう一枚は驚いているところへ、線を引くとあるのに、線を引くのを忘れているのです。この一年間ずっとこの問題に悩まされて、そのつど、いろいろな方法で努力してきたつもりですが、結局、学年末になっても直らないのは、俗にいう三つ子魂とでもいうのでしょうか。この頃では、私の方がどうにもならないイライラ、フテイッシュンやりに悩まされています」(66, 7) と、子どものそそっかしい性格をテストの様子から具体的に説明しながら、いろんな方法で直そうと努力してみたけれども直らないと悩んでいる様子がうかがえる。

その他にも、「絶望的」(68, 12)、「気が気でありません」(69, 11) など、子どもの勉強について相談しながら、母親自身の心境について言及している。これらの相談の検討は子どもの勉強が母親の生活に与えた影響について考えるときの重要な点であると考えられる。

次は、勉強が子育てに直接どのような影響を与えてきたかを、勉強と子どもの性格を関連付けて言及している相談内容から検討してみることにする。

(3) 勉強と子どもの性格

表IIIは、表IIの「勉強に関する悩みについて言及している相談」の中から、子どもの性格について言及している内容を取り出してまとめたものである。学校や家での勉強態度・テスト・成績と関連させながら子どもの性格について言及している。相談は子どもの性格についてであるが、そう思うようになったキッカケは、「授業参観の時に見た子どもの勉強態度」、「通信簿に書かれている行動記録」、「家での勉強態度を見て感じたもの」などである。

表Ⅲ 勉強・成績と性格

	性格と勉強	性格と成績
1949		
1950		
1951		
1952		
1953		
1954	○	
1955	○	
1956		
1957		
1958		
1959	○	
1960		
1961	○	
1962	○	
1963	○	
1964		
1965	○○	
1966	○	○○
1967		
1968	○	○○○
1969		
1970		
1971	○	
1972	○	

次は、勉強態度・成績と性格がどのように結びついているかを相談内容から分析したものである。

表Ⅲを見ると、勉強態度・成績と性格についての相談が1960年以降に増加していることがわかる。1953年、1954年、1959年にも現れているが、それに比べて60年以降は相談件数が増加している。

50年代の相談の傾向を見ると、50年代は学校での勉強態度と性格について言及している相談が目立つのである。

例えば、「小学校2年の長女。学校の成績は1年の時も2年の時も中以上でありながら、どの受け持ちの先生からも『授業中の態度がよくない』といわれました。聞く態度が落ちていない、人に協力しないなど。(中略)」(54、12)、「1年長男。非常に内気なので、大変困っています。学校でテストをしても、そうとうよい点を取り、理解しているようですが、発表がよくできません。非常に恥ずかしがりやなので、人前ではほとんど何もできません。(中略)」(55、8)、「3年男子。授業中先生から質問されても、ちっとも手をあげません。(中略) しっかり答えさせたいと思います。(中略) 性格はおとなしく、気が弱い(中略)」(59、

10) など、学校での勉強態度から感じた子どもの性格について言及している。

それに比べて60年代は、学校だけではなく、家での勉強態度、テスト、成績、通信簿の評価など、勉強に関わるさまざまな方向から見て感じた子どもの性格について言及している相談が目立つのである。

その相談内容を具体的に検討してみると、まず、第1に、家での勉強態度を具体的に説明しながら子どもの性格について言及している。

「算数の勉強の時ぐずぐずして、たった5問くらいの問題も30分かかってしまう。(省略) だんだんルーズになってきている。(省略) だらしない子になってしまうと困ると思います。」(62、11)、「算数の問題をやっている時 (省略) かならず1、2問わかりきっているところが間違っている。やった後決して見直すことをしない。(省略) もう少し、とことんまで自分でやるような強さとねばり強さを持たせたいと思います。(省略)」(63、10) など、算数の勉強をする時の様子を具体的に説明しながら、「だらしない」、「ねばり強くない」と子どもの性格について言及している。

第2は、子どもの性格をテストや成績と関連付けながら言及している相談である。

「2年生の長男。(省略) そそっかしい。(省略) 正しいものに○を、間違っただけのものに△をと書いてあるのに、△のところに×を書いてあるのです。驚いているところへ線をひくとあるのに、線をひくのを忘れていたのです。(省略)」(66、7) と述べているように、テストの時の間違いについても詳細に言及しながら子どものそそっかしい性格について相談している。次はテストの結果についての子どもの反応を見て、性格を言及している相談である。

「小6と2年生の兄弟。(省略) 心配なのは兄のほうで、とかく無気力です。例えば一斉テストの後、弟のほうは『(省略) 一問間違えちゃった』と口惜しがって帰ってくるのに、兄のほうは (省略) 悪いほうは考えない、いい成績ばかりみて弟のように口惜しがるところがありません。(省略) 宿題も進んでやろうとしません。(省略) どうしたらもっと積極的な子になるのでしょうか。(省略)」(66、1) のように、兄弟の性格を比較する上でも勉強や成績が使われている。

第3は、学校での勉強態度と性格について言及する時の判断基準が通信簿の評価である。

「小1年の長男。一学期の通信簿の“おこないようす”のところに「C」があるのです。「C」は組で2、3人で特に指導をようするものだそうです。私は体がふるえるほどびっくりしました。(省略) “きまりあるくらいができる”がCなのです。(省略)」(64、12)、「小1年生男の子。授業参観にいったがっかりしたことは、先生の話聞く気力がぜんぜんないのです。(省略) 学校の行動にあらわれるBが2つで全部Cです。(省略)」(66、12) など、学校での子どもの行動や勉強態度が通信簿に「5」とか「B」とか「C」などで表している。50年代にも学校での勉強態度について言及している相談はあったけれども、通信簿の評価について言及されている相談は見ることができない。

4 まとめと今後の課題

『教育相談』の「勉強」に関する相談内容の分析結果をまとめると次のようである。

まず、第1に、「勉強」・「成績」に関する相談内容について、50年代は、単に勉強をしていないことへの悩みの相談が目立つのに比べて、60年代は、勉強の様子や勉強の内容、テストの時の様子を具体的に言及したり、成績が悪いことについての相談が目立つ。つまり、50年代の相談からは、子どもが学校から帰ってきて勉強をしている姿を見るだけで安心している親の様子が伺える。しかし、60年代は、勉強をしている姿を見ているだけではなく、勉強のどこが苦手なのか、テストのどこがどのように間違っているか、通信簿の評価はどのようなのかなど、もっと子どもの勉強に具体的に関心を持つようになった親の様子が伺えることができる。

第2に、母親が勉強をみてやることに関する悩みについて、50年代は、生活の辛さや仕事の忙しさを強調しながら勉強がみてやれないことについて言及している相談が目立つのに対して、60年代は、仕事が忙しくて勉強がみてやれないと言及しているものの、強調している部分は何かの形で勉強をみてやっているが、今のままでは不安なので家庭教師を雇いたい、母親自身がもっと勉強をして子どもを教えなければならないなど、もうすでに考えている解決策について言及しながらそれについての意見を求めている相談が目立つ。1956年山梨の農村で行われた樋口光雄の調査によると、「あなたは、いままでにもっと勉強しておけばよかったと思ったことがありますか。それはどんな時であるか」という質問に、「子どもに勉強を聞かれたとき」が各層の女性の回答に強く現われたのである⁹⁹。50年代も60年代も子どもの勉強をみてやれないことへの悩みは同じけれども、相違点は、その解決法である。50年代の相談は勉強が見てやれないと悩んでいるだけの相談が目立つのに対して、60年代は母親が見てやれない代わりに学習塾や家庭教師に子どもの勉強を委託したいとの相談が出現している。

第3に、勉強と子どもの性格との関連について、勉強は子どもの性格を判断する際の重要な判断基準として登場する。50年代は、学校での勉強態度を見て感じた子どもの性格について言及している相談が目立つのに対して、60年代は、学校での勉強態度だけではなく、家での勉強態度・テスト・成績・通信簿の結果などを見て感じた子どもの性格について言及している相談が目立つ。勉強が家族の生活に深く浸透することで、学校の勉強態度だけではなく、60年代になると、勉強に関するあらゆる方面から見て感じた子どもの性格が気になってくるのである。相談では、子どもの性格について説明するために、勉強態度やテスト、成績、通信簿を用いているけれども、逆に言えば、相談している性格が直れば、勉強態度、テスト、成績、通信簿の評価も良くなってくると考えていると言えるのではないだろうか。

今回の分析対象は、静岡県という限定されて地域で発行されている教育雑誌ではあるが、相談内容からみて、地域の特色を持っているとは考え難い。今後は他の地域で発行されている教育雑誌の分析とPTAの活動や研究報告など資料範囲を広げて、高度成長期以降の学校教育に親はどのように関わってきたか、学校教育についてどのような悩みを持っていたか、学校教育は親の子育てにどのような影響を与えてきたかを明らかにしていきたい。

子育てにおける勉強の位置に関する考察：李

注

- (1) 川田秋子 1983、「家庭教育における母親の役割—家庭教育学級における若干の経験にもとづいて—」上智短期大学編上智短期大学創立10周年記念論文集『女性像 過去と現在』上智大学
- (2) 杉田初市 1955、「都会の子ども・田舎の子ども」『児童心理』第9巻第8号
- (3) 大塚茂雄 1957、「塾に通う子ども」『児童心理』第11巻第5号
- (4) 中西新太郎 2004、「受験競争から教育競争へ」後藤道夫編『日本現代史 28 岐路に立つ日本』吉川弘文館、208・209頁
- (5) 広田照幸 1999、『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書、88 - 91頁
- (6) 中西新太郎 1996、「子ども」渡辺治編『現代日本社会論』労働旬報社、421頁
- (7) 中野光 1988、『戦後の子どもの史』金子書房、136 - 140頁
- (8) 天野郁夫 1991、『学歴主義の社会史』有信堂
- (9) 山崎鎮親 1989、「戦後『学力』低下の問題における教育意識の構造」『東京大学教育学部紀要』第29巻
- (10) 樋口光雄 1956、「農村社会における教育観の研究」『全国教育研究所連盟年報』第6号、
- (11) 新堀通也他 1965、『学歴意識に関する研究調査』広島大学教育学部教育社会学研究室
- (12) 二関隆美 1971、「母親の教育態度と子どもとの関連—教育ママの子はどんな子か—」『青少年題研究』19
- (13) 本田由紀 2000、「『教育ママ』の存立事情」藤崎宏子『シリーズ〈家族は今・・・〉②親と子：交するライフコース』ミネルヴァ書房
- (14) 静岡出版社 1997、『(社) 静岡県出版文化会 50 (株) 静岡教育出版社 50 年史』
- (15) 樋口光雄 1956、「農村社会における教育観の研究」『全国教育研究所連盟年報』第6号